

琉球大学学術リポジトリ

平和学習に対する意識の地域差 — 沖縄と大阪の比較 —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2008-09-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本多, 正尚, 杉本, 善嗣, 大中, 玲奈, 中村, 宏三, 村島, 正浩, 藤本, 昌也, 井上, 哲子, 山脇, 敬一, 横町, 数則 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7251

平和学習に対する意識の地域差

－沖縄と大阪の比較－

本多正尚*、杉本善嗣**、大中玲奈**、中村宏三**、村島正浩**、
藤本昌也**、井上哲子**、山脇敬一**、横町数則**

Regional Differences in Consciousness for Peace Education
－ Comparison between Okinawa and Osaka Prefectures －

Masanao HONDA, Yoshitugu SUGIMOTO, Reina OHNAKA,
Kouzou NAKAMURA, Masahiro MURASHIMA, Masanari FUJIMOTO,
Tetsuko INOUE, Keiichi YAMAWAKI, Kazunori YOKOCHO

はじめに

不安定な国際情勢を反映し、平和に対する関心は年々高まっている。それに伴い、平和学習として沖縄を訪れる中学校、高等学校、あるいは沖縄での修学旅行の1つのプログラムとして平和学習を取り入れる中学校、高等学校も増えてきているようである。こうした沖縄で平和学習をする学校のために、学習書あるいはガイドブックも出版され、非常に役に立っている（例えば、沖縄平和ネットワーク、1997；沖縄協会、2005）。

こうしたものを読めば、戦争の悲惨さや基地問題の現状など、沖縄から発信したいメッセージが伝わってくる。しかし、これまで、メッセージを受ける側が、すなわち平和教育を受ける生徒やその周りの大人達が、沖縄や平和問題についてどのような印象をもっているかについて検証した研究は少ない。

そこで、今回大阪と沖縄でアンケート調査を行い、沖縄に在住している人と沖縄に在住していない人との間で、平和学習のあり方や沖縄のイメージなどについて比較検討を行った。

尚、本研究のアンケート調査に関しては、中学校の長期にわたる計画的な平和学習の一貫として行われたものである。本来ならば、こうした調査

は研究者本人あるいは研究者の厳密な指導の下に行われ、発表されるべきものであるが、中学生の自主的な取り組みによって得られたデータでも、十分公表するに値すると判断されたので、今回の出版に至った。

対象と方法

1. 実施計画

大阪府大東市立四条中学校で、2007年5月に沖縄への修学旅行が計画された。これに付随する形で、中学生に対する沖縄文化・歴史などの事前解説、大阪でのアンケート調査、沖縄でのアンケート調査、修学旅行後の事後指導などが企画された。そのうち、大阪でのアンケート調査、沖縄でのアンケート調査の結果について分析した。

2. 調査対象・期間・場所

大阪での調査は、2007年3月7日にJR学園都市線住道駅を利用する男女を対象とした。沖縄での調査は、2007年5月24日に、沖縄本島内でのタクシー研修の際に、出会った男女に対して行った。ただし、それぞれの地域で出身地に関する質問は行わず、前者を大阪在住者、後者を沖縄在住者として扱った。

* 琉球大学教育学部自然環境教育コース

** 大阪府大東市立四条中学校

3. 調査方法

無記名自記式質問紙によるアンケート調査を行った。大阪での調査は、当時中学生2年生約120名が大阪府大東市JR住道駅前で駅を利用する通行人に対して行った。沖縄での調査は、3年生に進級した同じ生徒が、沖縄での2泊3日の修学旅行の第2日目のタクシー研修の際、那覇から名護に向かう途中に行った。

4. 調査内容

大阪での質問項目は、性・年齢などの基本属性、沖縄訪問の有無、沖縄のイメージ、沖縄で行ってみたい場所、沖縄での修学旅行に求められるものなどの他、沖縄戦や基地問題に対する知識に関する質問などで構成された。

これに対し沖縄での質問項目は、性・年齢などの基本属性、沖縄訪問の有無、大阪のイメージ、沖縄で訪れて欲しい場所、沖縄での修学旅行に求められるものなどの他、沖縄戦や基地問題に対する知識に関する質問などで構成された。基本的に大阪と同一の項目で構成するようにしたが、内容上修正が必要なものは適宜修正した。また、基地問題の必要性に関する項目については、沖縄の事情を配慮し、「どちらでもない」という選択肢を追加した。

5. 解析方法

今回の調査での分割表の検定は、本来なら多元配置の分析を行うべきであるが、今回は基礎的なデータの解析に主眼をおいたので、フィッシャーの正確確率検定、 X^2 検定を用い、 2×2 より大きい X^2 検定で有意差が出た場合は残差分析を行った。また、データ数が少ない場合は、一部検定を省略した。

結果

1. 対象の属性

大阪では140人からアンケートを回収し、そのうち139人から有効回答を得た（有効回答率99.3%）。内訳は、10代29人、20代23人、30代17人、40代14人、50代27人、60代以上29人であった。

沖縄では124人からアンケートを回収し、その

うち120人から有効回答を得た（有効回答率96.8%）。内訳は、10代2人、20代15人、30代29人、40代21人、50代27人、60代以上26人であった。

2. 大阪での調査結果

大阪で行った調査の結果を表1から表6に示した。沖縄を訪問したことのある人は、全体で54%となった（表1）。また、どの年代でも50%前後の値であり、年代間で有意差はなかった（ $X^2=8.07$, $p=0.152$ ）。

表1. 来沖の有無

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
はい	19	16	7	9	11	13
いいえ	10	7	10	5	16	15

沖縄と聞いてイメージするものは、頻度で見ると海が多かったが、年代が上がるにつれ、戦争関連が増え、60代以上では、海より戦争関連が多くなる傾向を示した（表2）。 X^2 検定の条件を満たさなかったため、10代から30代と40代以上に分けて、 X^2 検定をおこなったところ、有意差が見られた（ $X^2=11.17$, $p=0.00376$ ）。さらに残差分析を行ったところ、10代から30代では海、40代以上では戦争関連と答える割合が有意に多かった。

表2. 沖縄でイメージするもの

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
海	15	12	7	9	8	4
戦争関連	0	1	2	3	6	6
その他	13	6	3	2	9	8

沖縄で訪れてみたい場所は、頻度で見ると10代では国際通りが最も多かったのに対し、それ以外では美ら海水族館が最も多く、次いで首里城、ひめゆりの塔、国際通り、平和祈念公園の順になった（表3）。また、年代が高くなるにつれ、戦争関連施設の割合が大きい傾向を示した。 X^2 検定の条件を満たさなかったため、10代から30代と40代以上に分けて、 X^2 検定をおこなったところ、有意差が見られた（ $X^2=11.94$, $p=0.0356$ ）。さら

に残差分析を行ったところ、10代から30代では国際通りと答える割合が有意に多かった。有意差はないものの、40代以上では、ひめゆり平和祈念資料館を答える割合が多くみられた ($p=0.0507$)。

表3. 沖縄で最も訪問したい場所

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
美ら海水族館	7	6	8	6	9	9
首里城	7	9	4	2	6	8
国際通り	9	1	0	1	1	0
ひめゆり	3	1	2	2	7	6
平和祈念公園	1	1	1	1	3	4
その他	1	4	0	2	1	2

6月23日が何の日かという質問を行い、慰霊の日または沖縄戦の終戦日を正解として扱った。全体の中で正解者は1名しかいなかった(表4)。

表4. 6月23日が何の日かという問いに対する答え

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
正解	0	0	0	1	0	0
不正解	29	23	17	14	27	30

日本の米軍基地に対する沖縄の割合に関する質問を行い、米軍占有施設の75%を正解として扱った。全体としては35%の正答率だった(表5)。年代別でみると10代の正答率が高くなっているが、年代間で有意差はなかった ($X^2=6.33$, $p=0.275$)。

表5. 日本の米軍基地に対する沖縄の割合に関する問題

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
正解	15	7	7	5	6	9
不正解	14	16	10	9	21	21

日本におけるアメリカ軍基地の必要性を聞いた。全体としては57%が不必要と答えていた(表6)。年代別でみると、どの年代も60%前後であり、年代間で有意差はなかった ($X^2=3.22$, $p=0.667$)。

表6. アメリカ軍基地の必要性

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
必要	13	10	5	6	8	14
不必要	16	11	12	6	16	14

中学校の修学旅行に求められるものを聞いた。全体としては47%が平和学習と答え、体験学習や観光を求める意見より多い傾向を示した(表7)。年代別でみると、30代と40代で平和学習と体験学習がほぼ同じ値を示したのに対し、10代では体験学習の割合が低い傾向を示した。また、50代と60代以上では平和学習を求める意見が高くなった。 X^2 検定の条件を満たさなかったため、10代から30代と40代以上に分けて、 X^2 検定をおこなったところ、有意差が見られた ($X^2=17.99$, $p=0.000443$)。さらに残差分析を行ったところ、10代から30代では観光、40代以上では体験学習と答える割合が有意に多かった。

表7. 中学校の修学旅行に求められるもの

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
平和学習	13	10	6	5	15	15
体験学習	4	4	7	6	11	11
観光	10	8	3	0	1	2
その他	2	0	1	1	0	2

3. 沖縄での調査結果

沖縄で行った調査の結果を表8から表12に示した。大阪では沖縄で訪れてみたい場所についての回答を求める質問を行ったのに対し、沖縄では沖縄在住の人が観光客に訪れてもらいたい場所についての回答を求める質問を行った。頻度で見ると水族館が最も多く、次いで平和記念公園、首里城となった(表8)。10代から30代と40代以上に分けても、 X^2 検定の条件を満たさなかったため、フィッシャーの正確確率検定を行ったところ有意差はなかった ($p=0.229$)。

表8. 沖縄で最も訪問してもらいたい場所

	10代	20代	30代	40代	50代	60代 以上
美ら海水族館	2	7	12	13	15	6
首里城	0	1	2	3	1	6
国際通り	0	4	1	2	0	1
ひめゆり	0	0	1	2	3	3
平和祈念公園	0	2	12	1	7	10
その他	0	0	0	0	1	0

6月23日が何の日かという質問を行い、慰霊の日または沖縄戦の終戦日を正解として扱った。全体で89%の人が正解した(表9)。ただし、 X^2 検定の条件を満たさなかったため、検定は行わなかった。この中には沖縄出身でない人も含まれている可能性があり、沖縄出身者だけを対象とすれば、この値はさらに高くなる可能性がある。

表9. 6月23日が何の日かという問いに対する答え

	10代	20代	30代	40代	50代	60代 以上
正解	2	12	25	17	25	26
不正解	0	3	4	4	2	0

日本の米軍基地に対する沖縄の割合に関する質問を行い、米軍占有施設の占める割合75%を正解として扱った。全体としては85%の正答率だった(表10)。ただし、 X^2 検定の条件を満たさなかったため、検定は行わなかった。

表10. 日本の米軍基地に対する沖縄の割合に関する問題

	10代	20代	30代	40代	50代	60代 以上
正解	2	12	23	17	24	24
不正解	0	3	6	4	3	2

日本におけるアメリカ軍基地の必要性を聞いた。全体としては50%が不必要と答えていた(表11)。年代別でも、どの年代も50%前後だった。ただし、 X^2 検定の条件を満たさなかったため、検定は行わなかった。

表11. アメリカ軍基地の必要性

	10代	20代	30代	40代	50代	60代 以上
必要	1	7	5	7	11	10
どちらでもない	0	2	9	2	3	1
不必要	1	6	13	12	12	13

中学校の修学旅行に求められるものを聞いた。全体としては体験学習が56%と最も多く、平和学習は31%だった(表12)。年代別でみると、10代と20代で平和学習の割合が高い傾向を示した。 X^2 検定の条件を満たさなかったため、10代から30代と40代以上に分け、その他は除いて、 X^2 検定をおこなったところ、有意差は見られなかった($X^2=0.73$, $p=0.694$)。

表12. 中学校の修学旅行に求められるもの

	10代	20代	30代	40代	50代	60代 以上
平和学習	2	6	6	5	9	9
体験学習	0	6	19	14	16	12
観光	0	1	2	2	2	5
その他	0	2	2	0	0	0

4. 大阪と沖縄の比較

大阪在住者が行ってみたい場所と沖縄内在住者が行って欲しい場所の比較を行った(表13)。頻度でみると、両県共に水族館が最も多かったのは変わらないが、大阪では首里城が第2位になったのに対し、沖縄では平和記念公園が第2位となった。 X^2 検定を行ったところ、大阪と沖縄の間で有意差がみられた($X^2=34.03$, $p<0.0000$)。さらに残差分析を行ったところ、大阪では、首里城、ひめゆり平和祈念資料館、沖縄では水族館、平和祈念公園と答える割合が有意に多かった。また、有意差はないが、戦争関連施設を挙げる割合は、大阪の24%に対し、沖縄では35%と若干多くなる傾向を示した。

表13. 大阪在住者が行ってみたい場所と沖縄内在住者が行って欲しい場所の比較

	大阪	沖縄
美ら海水族館	45	55
首里城	36	13
国際通り	12	8
ひめゆり	21	9
平和祈念公園	11	32
その他	10	1

慰霊の日と米軍基地の割合に関する問題の比較を行った(表14・15)。共に沖縄のほうが、有意に正答率が高かった($X^2=205.5, p<0.000$; $X^2=65.1, p<0.000$)。特に慰霊の日に関する設問は、大阪では1%未満だったのに対し、沖縄では89%の人が正解していた。これに対し、米軍基地の割合に対する正解は、大阪で32%、沖縄で92%だった。

表14. 6月23日に関する問題の正答率の比較

	大阪	沖縄
正解	1	107
不正解	140	13

表15. 日本の米軍基地に対する沖縄の割合に関する問題の比較

	大阪	沖縄
正解	49	102
不正解	91	18

基地の必要性の賛否に関する問題の比較を行った(表16)。大阪で基地が必要と答えた人は43%、沖縄では表11の「どちらでもない」も含めた割合が37%となった。しかしながら、有意差はなかった($X^2=0.02, p=0.893$)。

表16. 基地の必要性に関する比較

	大阪	沖縄
必要	56	41
不必要	75	57

中学校の平和学習に求めるものに関する比較を行った(表17)。 X^2 検定を行ったところ、大阪と沖縄の間で有意差がみられた($X^2=15.80, p=0.00125$)。さらに残差分析を行ったところ、大阪では平和学習、沖縄では体験学習を求める割合が有意に多かった。

表17. 中学校の平和学習に関する比較

	大阪	沖縄
平和学習	64	37
体験学習	43	67
観光	24	12
その他	6	4

考察

沖縄でもっとも訪問したい場所という問に関して、大阪では、年代が高くなるにつれ、戦争関連施設の割合が大きい傾向を示し、5%水準の有意差には少し届かないものの、ひめゆり平和祈念資料館を挙げる割合が40代以上で高くなった(表3)。これに対し、10代から30代では国際通りと答える割合が有意に多かった(表3)。大阪で沖縄を訪問したことのある人の割合をみると、どの年代でも50%前後の値であり、年代間で有意差はなかった(表1)。このことを考慮すると、沖縄訪問の有無の割合の差異が年代間に存在し、それによって年代間の考え方の違いをもたらしたとは考えにくい。やはり、戦争に対する意識自体が、年齢が高くなるにつれ、強くなるためと考えられる。

しかし、こうした訪問してもらいたい施設に対する年代間の意識の差異は、実際に日本で唯一地上戦を経験した沖縄ではみられなかった(表8)。戦争を経験している60代以上の世代、アメリカ統治を経験している40代および50代の世代がいるにも関わらず、世代間で差異が存在しないのは驚きである。これは、戦争関連施設を訪問するより、純粋に沖縄を楽しんでもらいたいという考え方が現れた結果なのかも知れない。

また、非戦争関連施設の中で、大阪では首里城の割合が高かったのに対し、沖縄では美ら海水族館の割合が高かった(表13)。同様に、戦争関連

施設の中では、大阪ではひめゆり平和祈念資料館の割合が高かったのに対し、沖縄では平和祈念公園と答える割合が有意に多かった(表13)。戦争関連施設としては、沖縄戦の終戦記念日である6月23日に平和祈念式典の行われる平和祈念公園は沖縄在住者にとって、特別な意味があるものであり、規模も他の施設より大きいのが、県外の人には馴染みが薄かったため、今回のような結果になったのかも知れない。

こうした差異は、沖縄戦や米軍基地に対する知識にも見られる。慰霊の日と米軍基地の割合に関する問題の比較では、共に沖縄のほうが有意に正答率が高く、大阪での米軍基地の正答率32%だったのに対し、慰霊の日に関する設問では1%未満だった(表14, 15)。これも沖縄在住者と他府県在住者の間で、沖縄の認識に差異が存在したためだと考えられる。

しかしながら、こうした差異が基地の必要性に関して有意差となって現れてこないことは非常に興味深い(表16)。一見すると、日本で一番多くの米軍基地を抱えた沖縄在住者が最も基地問題に苦しみ、他府県より多くの不必要という回答が期待されそうである。しかしながら、沖縄では基地に依存して生活している人も多く、問題は単純ではないことがこのアンケートからも強く示唆された。

中学校の修学旅行に求められるものに関する回答では、大阪では、10代から30代では40代以上より観光と答える割合が高く、その一方、40代以上では10代から30代より体験学習と答える割合高くなったが、どの年代でもほぼ平和学習と希望する頻度が最も多くなっていた(表7)。これに対して、沖縄では、中学校の修学旅行に体験学習を求める意見が多かった。また、世代が高くなるにつれて、平和学習を求める意見が高くなることもなく、世代間の差異は存在しなかった(表12)。ほとんどの沖縄の小学校・中学校で平和学習が行われているにも関わらず、沖縄在住の人には、訪れてもらいたい場所と同様に、他府県の人との認識の差が存在することが明らかになった。しかも、その差異は、戦争関連施設よりは観光施設、平和学習よりは体験学習と我々の予想を覆すものであった。

こうした認識の差異、しかも我々の予想するような差異とは異なる差異が存在することを考慮しながら、今後の平和学習は検討されていくべきであろう。

おわりに

今回の調査をした中学生は、統計などの難しいことは分からないが、実際に大阪と沖縄で考え方に差異があることを学んだ。しかも、自分たちが行ってみたいと思っていた場所と異なる場所を沖縄在住者が勧めていたり、中学校の沖縄への修学旅行では当然平和学習が一番と沖縄在住者は答えると思っていたところに、体験学習が一番という結果になったりと、自分たちと異なる地域に住む人は、自分たちと異なるものの考え方をすることを実感したことだろう。また、基地問題では、沖縄在住者は、ほとんど米軍基地は不必要という回答を予想していたが、これも中学生にとっては見事に予想を裏切られる結果となり、この問題の難しさを知ったと考えられる。

このように単に修学旅行を一つの行事として捉えるのではなく、一連の学習指導として考え、長期的に指導することは、修学旅行だけでは得られない貴重な経験を中学生にもたらすと考える。もちろん、通常の修学旅行を行った場合より、教員の負担は大きくなるが、今後こうした取り組みにますます必要になってくると考える。

謝辞

今回研究を行うにあたり、ご協力をいただいた対象者の皆様ならびに実際にデータの収集作業にあたった大阪府立四条中学校3年生諸君に心から感謝の意を表す。

引用文献

- 沖縄平和ネットワーク(1997) 新歩く・みる・考える沖縄、沖縄時事出版
 沖縄協会(2005) 平和学習ハンドブック 清ら島沖縄増補改訂版、日本広報センター